

会報

〒183-8534
 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学ロシア語
 鈴木研究室気付
 東京外語ロシア会
 TEL 042-330-5268
 FAX 042-330-5429
 振替口座 00110-8-22338

ロシアよ、お前はどこへ疾駆するのか

渡辺 雅司

この夏、久しぶりにロシアを旅してきた。モスクワには、去年の冬一週間ほど行ったので、その変貌ぶりはある程度知っていたが、サンクト・ペテルブルクは十二年ぶりとなる。しかも今回は最初にヘルシンキに五日ほど滞在してから、列車でロシアに入ったので、コントラストが余計くっきりと感じられたのだ。

フィンランドは原語ではスオミ、つまり湖の国である。モスクワ経由だったが、まずラド方湖の巨大な広がりが目に入った。続いてまさに森の中に湖沼が点在するフィンランドの独特の地形が眼下に迫ってくる。何も調べずに飛行機に乗ったので、ヘルシンキがたぐさんの島の上に作られた町だということも知らなかった。

ヘルシンキ空港では私の妻安井侑子(のモスクワ大学時代の旧友たちが、出迎えてくれた。シルカにライヤ、そ

れにシルカの夫でチリ人のトマス。まさに五十年ぶりの再会である。そしておかしなことに、それからの数日間、ヘルシンキにいながら、ロシア語演けの毎日になったのである。しかもすぐれたロシア語教師でもあるシルカは、われわれの発音がおかしいと、いちいち直そうとする。時には「あんたの発音だっておかしいよ」と罵うつときもあったが、発音矯正されるのも久しぶりなので、それなりに楽しい瞬間だった。

都心から車で十五分ほどのところに、森の中に住宅が点在する感で、隣接する広大な森にはなんとヘラジカが生息すると聞いた。近くを走る電車も防音装置がついているようで、ほとんど騒音らしきものがない。静けさと清潔さ—これがヘルシンキの第一印象だった。しかもこの印象は都心に出て変わった。さすがこの印象は都心に出て変わった。さすがこの印象は都心に出て

ところで今回の旅の目的のひとつは、いわゆる「60年代人」を訪ねることだった。そんな計画を立て、出発をまじかにひかえた七月六日、60年代の「雪解け」時代を代表する一人の作家が亡くなった。ワシリー・アクシヨノフ。



左からフォニヤコー
 「野良犬」の前で
 カフェ、筆者、安井侑子
 フ夫人、

短編「星の切符」や「パパ、なんて読むの？」でわが国でも早くから紹介されていた彼は、一九八〇年、自主論集「メトロポール」を編集、出版したために、出国を余儀なくされ、ワシントンのジョージ・メイソン大学で長年、ロシア文学を講じていた。その頃一週間ほど泊めてもらったことがあるが、「アメリカ人には、ロシア人であることとの楽しさがわからない」と、嘆いて

ソ連崩壊後は帰国も自由になり数年前からスペイン国境の保養地ベアリツに移住し、自由にこの二ヶ所を行き来していたらしい。亡命してからも、旺盛な創作活動を続け、「クリミア島」、「火傷」、最近では「モスクワ・クワ・クワ」などの長編を出版し、ロシア国内でも若い読者の心をつかんでいた矢先、昨年一月に脳出血で倒れ、それ以後意識を回復せぬまま、逝ったのだ。主のいないヤウザ河畔の高層の文化人住宅には、憔悴しきった未亡人マヤと彼女からひと時も目を放さない老いた忠犬フーシキン(アクシヨノフの命名)がひっそりと暮らしていた。

来日したときもジョギングを欠かさず、七十歳を過ぎて逆立ち健康法を実践していたワシヤ・アクシヨノフ。その朝も上機嫌で、冗談を飛ばしては自分で笑い、ハンドルを握って、アクセルを踏んだところで、発作が起きたのだという。マイヤにはそれから何が起こったのか、三ヶ月間の記憶がまったくないという。彼の墓はエセーニンやヴィソツキイの墓があるワガニ

国!しかしシルカの家の地下にはコンクリートのシェルターが付いており、この国の地政学的複雑さを垣間見た気がした。

ロシア語生活七十年……………米内哲雄 4
 府中便り：鈴木義一 5 着任の挨拶：前田和泉 6
 ロシア会計報告7 「語劇」を役者が語る… 8
 二度目の語劇……………杉 香苗 9
 イルクーツクの恩師……………沼野恭子 10
 北の島の、東の果てで……………不破理江 11
 モスクワ郊外の夕べ……………関根秀人 13
 現代ロシア作家による講演会のお知らせ……………14
 文献紹介 加藤栄一『時事ロシア語』鈴木義一 15

コヴォ墓地にあった。また墓碑もなく、花輪に囲まれた土饅頭の前には、俳優にしたような渋い顔のワシーヤの写真。その数歩先には、もつとも親しかった吟遊詩人ブラート・オクジャワの、サインを彫りこんだだけの自然石の墓碑があった。

白夜のペテルブルクに話を戻そう。レニングラードフィルの旧友の家に泊まるはずだったのが、ヴァカンスで外国へ出るようになったために、急遽日本センター長の畏友朝妻幸雄氏(昭和43卒)の計らいで、ネフスキー通り近くのウイークリー・マンションを借りることにした。ところがなんとその家は、ドストエフスキーとも親父があり、かの最初の女性テロリスト、ベラ・ザスリーチを無罪にした裁判官としても知られる文筆家コーニの住まいだったのである。この町でのわれわれの水先案内人は、高名な批評家のフォニャコフ氏。

彼の案内で「銀の時代」の詩人たちのたまり場だったカフエー「野良犬」や、コマローヴォのアフマトワの別荘へつれていってもらった。そこには初老の作家夫婦と、作家同盟の議長という人が今は住んでいた。あつという間に数人の文学関係者が集まり、ウオツカを飲みながらの歓談が始まった。そしていつしか誰からともなく、オクジャワの歌が飛び出し、全員で合唱となった。そう、ここに集まった作家たちはオクジャワの歌を聞きながら育った人たちだった。夜中すぎに見たピーテル

の夕焼けの美しかったこと。その日は海軍記念日ということもあって、明け方まで酔った若者たちが街を練り歩いていた。

今回はじめて昼間の特急列車でモスクワに移動した。ロシアの北部地方でモスクワから三十分ほど列車で行ったところにペレデルキノという作家村がある。そこにはバステルナークの博物館もある。しかし今回は列車ではなく、家族ぐるみの付き合いをしてきたオクジャワの末亡人オリーヤの運転する車



お土産の浴衣を着てポーズをとるオリーヤ・オクジャワ 左はジェーニャ・レイン

で行った。そのオクジャワ博物館では、毎週土曜日に催し物がある。その日は映画「モスクワは涙を信じない」の主題歌「アレクサンドラ」で有名なニキーチン夫妻の野外コンサートだといふ。しかも詩人のヴォズネセンスキーの記念植樹があるので、一緒に植えてくれと言われ、村の入り口の植木屋で

ヒバまで頼んだのだった。

永遠の少女のような純朴なオリーヤ、運転しながら「ブラートは詩人としてというより、人の心をひきつけるという点でゲーニャ(天才)だわ」と何度も言った。グルジアとアルメニアの血をひくオクジャワ、彼の「グルジアの歌」は私のもつとも好きな歌だが、その一節が刻まれた彼の旧別荘を背景に、仮設舞台が作られ、赤松、落葉松の林の中に大きなテントを張ったコンサート会場が作られている。最前列の招待席に座らされ、コンサートを待っている。二百人近い聴衆が一瞬とよめいた。なんと八十歳になるファジーリ・イスカデル夫妻がやってくるではないか。夫妻はすぐにわれわれに気づき、抱き合ったあと、隣に座ったのだ。アフハジア出身の彼とはスファミで連日ワインを痛飲したことがある。そのとき同じホテルにはサハロフ博士や反体制活動家コーベレフもいた。一九七八年のことだ。さらにタバコをくわえてやってきたのがプロツキーの親友の詩人ジェーニャ・レイン。昔馴染みの作家たちとの思いもかけぬ再会はそれで終わらなかつた。なんとペレデルキノの主ともいべきエフトゥシエンコが、毎度のことながら、こちらが恥ずかしくなるようなド派手なシャツに短パンといいでたちで現れ、私の左隣に座るや、藪から棒に明日ブローク博物館に連れて行くぞと言う。

オクラホマ大学教授として長年、アメリカで暮らしながら、誕生日には朗



ファンに取り巻かれるエフトゥシエンコ

読会のためにモスクワに飛んでくるエフトゥシエンコはやはりスーパースター。以前半年彼の家を借りたり、神戸のわが家にも泊まって、十一月の須磨の海で一緒に泳いだこともあるが、彼とも十二年ぶりの再会、もう喜寿を迎える年だ。しかし猛禽類のようにあたりを狙う目は健在だった。彼は出版されたばかりの「フットボール万歳」という詩集あるいは自伝(?)をイスカデルに渡していた。彼がプロのサッカー選手になり損ねたことはその「早すぎた自叙伝」にある。コンサートが始まると、カメラマンがこつちをしきりに写している。帰国してからわかったのだが、このときの様子はインターネットで配信されていたとロシア人の友人から知らされた。

こうして期せずして、古い友人たちに一度に会えたのだが、私たちにはもう一組、どうしても会いたい人たちがいた。詩人のベラ・アフマトウリーナ、

ボリス・メツセルル夫妻である。彼らはレニングラード街道二六番地に住んでいる。いやこの番地こそ、かつての「メトロポール」の同人たちが住んでいたマンションなのだ。でもボボフは脳梗塞で倒れたと聞いた。電話ではベラも気分がすぐれないとのことだったので、あきらめかけていたらなんと、貴婦人をエスコートするようにボリスがベラの腕を取ってやってくるではないか！黒のスーツが好きなベラは、黒い帽子に黒いベール、その気品に圧倒



ベラ・アフマドゥーリナ

された。一瞬これは奇跡かと思ったほどだ。昨年会ったとき、すでにかなり老け込んでいたので、内心不安だったのだ。

寿司をつまみながら二時間ほど話したが、時にボリスにも聞き取れないほど繊細なベラのことばはそのままた詩になるようだった。まるで小鳥が囀っているよう。彼らにとってもワーシヤの死は大きな痛手だったことが察せられた。

一九七八年、アルバート通り近くの

彼らのアトリエにはたくさん詩人、作家、芸術家が集い、夜を徹して飲み、語ったものである。その中心にはいつもワーシヤがいた。黒い膝までのブーツが似合うベラは、コニヤックを一気に飲んでボリスを心配させていた。ヴォイノーヴィチ、エロフエーエフ、ビートフがいた。ワーシヤとヴォイノーヴィチはばかりかしたことだが、何年車を洗っていないかを競っていた。内務省の大尉という人物もいれば、アラフの石油王の息子まで階段に座り込んでいた。夜中近く、エフトウシエンコがイギリス人の奥さんを連れて姿を見せると、一瞬その場がしらけたのをおぼえている。でもそんなことはお構いなしに、彼はわれわれを大きな声で紹介するのだった。プレジネフ末期のこの時期、このアトリエだけはみんなが熱く生きていた。「メトロポール」同人の有名な集合写真があるが、それはこのアトリエのものであり、多くがその夜集まった人たちだった。

レストランでの食事を終えるとボリスは、散らかっているけど寄っていけと言ってくれた。ガラソとした大きな客間、グヴィドンという滑稽な姿の愛犬が迎えてくれた。体をゆすると「カクカタ」と奇妙な音を出す犬だ。「昔はたくさん集まったわね」とベラ。「みんな若くて、元氣だった」とボリス。政治的ではなく、芸術的反体制の異議申し立てとしての「メトロポール」、その出版に向けて、あの頃彼らは力を結集し、神経を張りつめていたのだと思う。

あれからちょうど三十年。ソ連は崩壊し、ロシアはハイパー資本主義へと突っ走った。どの店も24時間営業と書かれているのはちよつと待てよともいいたくなる。モスクワ・シチーなどという超高層ビル群の建設も進んでいる。町には飛び切り高級な外車がひしめき、私が住んでいたクトゥーゾフ大通りはさながらレース場、百数十キロの猛スピードで駆け抜けていく。その一方で確実に去り行く世代ながら、書店にはアクシヨノフの著作が平積みされ、ベラやビートフ、エロフエーエフら60年代人の著作もいまだ健在だった。ボリスの仕事部屋には、百冊近いファイルが書棚を占め、すべてベラ関係の資料だという。伝説的ハレリーナ、プリセツカヤの従弟で、自身すぐれた画家ながら、愛妻ベラの才能をこよなく愛し、こうしてすべての資料を整理しているのだ。アクシヨノフの未亡人も「ワシントンの家には、ワーシヤの原稿をたくさん残したままなの」と言っていた。その話をすると「そこにはベラとの往復書簡もあるはず」とボリスは目を輝かせるのだった。

ロシアは外側から見ると、虚飾と取れる変貌を遂げていた。これをもつてロシアはすっかり変わってしまったと慨嘆する声をよく耳にする。しかし少なくともわれわれが付き合ったインテリたちはそんな動きとは無縁なところで生きていた。ロシアには貧しくあつて欲しいという願望がわれわれのどこかにありはしないか。少なくとも西側

並みになって欲しいという暗黙の思いがどこかではたらく。これはかつてゲルツェンが強調したメシヤンストヴォ(小市民性)にロシアは染まっていた。でも変わり行くロシアも、またロシアには違いない。そんなことを思いながら、街を歩いていると、肌をむき出しにした若い男女が、ビール壘を喇叭のみしながら、屈託なく通り過ぎていく。ビールがこよなく好きな私などは、これでいいのだ。「ロシアよ、あまりお行儀よくならないでくれ」と祈らないではいられない。こういうことが許されなくなるとき、ロシアにもメシヤンストヴォがはびこるのだとぞか思えたのだ。そこにはフィンランドや西欧にはないヴァイタルなエネルギーがあふれかえっていた。

モスクワ最後の夜、寝つけなかった私は、ウクライナ・プリバールからクトゥーゾフ大通りに出た。真夜中ながらも東の空が白み始めるなか、爆走する自動車たちにぼんやりと見とれていった。そのときなぜか、もう半世紀以上も前、母の実家である大田区馬込の農家に行くたびに、弟を連れてすぐ脇を走る第二京浜国道を時折爆走する車やバイクを興奮しながら見に行つたことを思い出していた。その後日本は高度成長路線を突っ走つたが、果たしてロシアはどうなるのか。ゴーゴリの「ロシアよ、お前はどこに疾駆するのかわ？」という問いを私も思わずつぶやいていた。(昭和四四年卒)

ロシア語生活七十年

米内 哲雄



昭和十一年三月(陸軍クーデターの二・二六事件のあった直後)、僕は東京外語露語部の入試に合格した。その時、僕は何となく、「これで僕の運命は決まった」と感じた。

入学式での校長の訓示には度肝を抜かれた。「本校はご覧の通りのバラック建て、一度火がつけば五分間で焼失すると丸の内消防署のお墨付きです。煙草の火に注意を！」

しかし校舎はボロでも語学の中身は充実していた。当時ロシア語を教えていたのは、東京、大阪の両校と私立の天理外語、それに満州のハルビン学院の四校だけ。最も歴史の古い東京外語の教授陣は権威者ぞろいだった。

主幹の八杉貞利教授は病氣療養から回復されて間もなくでしたが、その講義は立て板に水の如く、朗々として明晰で、緻密、博識を極めていた。

後年、僕が中国地方の「萩・津和野」を観光旅行した時、津和野の郷土館ではからずも、同町出身の偉人として、森陽外、西周について八杉先生の事跡が詳しく紹介されていた。その中で先生は八十六歳を迎えた時の述懐をロシア語の二行詩と短歌一首で披露していた。

Ira beka ne kazhivam.

The morozochi ne nepriyemam.

(二世紀を生きることはできない。)

青春、重ねてきたらず、の意。) いたずらに過ぎこしものか 八十あまりやつの年波けふこえんとて 先生は律儀な方で賀状、礼状は言うに及ばず、「ロシア酒」などの名随筆の著書を何冊か頂き、感激に堪えない。

主任の松田衛教授は一見、古武士の風格があり、頑固そうだが根はやさしい人だった。単刀直入、さつぱらんに歯に衣着せぬ人柄で、先生が著した本邦最初の本格的「松田和露大辞典」は豊富な用語に加えて俗語、隠語など卑猥な言葉まで網羅され、異彩を放っていた。当時就職に迷っていた僕は、松田先生の勧めに従って苦渋の選択ながら、満州の関東軍司令部(陸軍通訳)に奉職した。入隊後まもなく、ロシア人講師の後任探しに新京へ来られた松田先生と再会を喜び合ったが、それが最後の別れでした。後年、なぜか先生の葬儀に参列できたことはせめてもの

幸いでした。

除村吉太郎教授が在外研究員だったモスクワ留学から帰国されたのは、僕ら二年生の頃だったが、文学科だった僕は特別にお世話になった。文学科は全部で五人だけなので誰か休むとまるで個人教授みたくだった。先生の講義は噛んで含めるように微に入り細を穿ち、精細、巧緻、ロシア文学についての学殖の深さは驚嘆するのみでした。後年、教職を追われたすえ、日本共産党から参議院議員に立候補されたと聞き、驚かされました。教育と医療がほとんど無料という旧ソビエトの現実生活を味わった先生は純粹な気持ちで、そこに理想の境地を見出したのでしよう。

後に僕がタジック(ロシアの中央アジア)の作家サドリイ・ディン・アイニの『フハラ』ある芸術革命家の回想』を未来社から刊行して一部を贈呈したら「ソビエトの地方作家の翻訳も大事な仕事です」と激励されました。

馬場哲哉講師(ペンネーム外村史郎)にも文科生として深くお世話になった。ある時、ロシア語上達の方法を尋ねたら「ロシア作家の翻訳された日本語を再びロシア語に翻訳するんだね。上達すること請け合いだよ」。博士の先生なれば、その名言だが、駆け出しの僕らには歯が立たない。しかしその教えはずっと心に残っている。

終戦の前年ごろ、先生は外務省の囑託として新京に移って来られたのを期に、僕は軍特配の日本酒を携えて先生宅にお邪魔し、再会を喜び合って杯をかされた。暗い時代にあつてのささやかな休みのひとときでした。

終戦直後、先生も僕も家族と一緒に北朝鮮の平壤(今のピョンヤン)に疎開したが、逢う機会はなかった。その後先生は駐在のソ連軍本部に、邦人引揚げの折衝に出頭されたらしいが、再び帰宅することはなかった。誠に残念でならない思いで一杯です。

さて、僕は満二十二歳で東京外語露語部を卒業して満州の関東軍(陸軍通訳)入りして以来、満七十七歳で最後の勤め先(社)北海道倶楽部(調査課)会報編集)を退職するまで、ほぼ五十年を働き通してきた。

最初の関東軍司令部は旧ソ連軍の背信的侵略を受け、あえなく敗戦。僕らは家族援護のため平壤市に派遣されたまま難民生活に入った。駐留ソ連軍の依頼で、「韓国の歴史、法律、その他」の日本語からロシア語への翻訳に従事、糊口を凌ぐことができたほか、シベリア行きをまぬがれたことは大きい。ロシア語のお蔭だった。

一年後、帰国して北海道新聞などで記者生活に入った。東京の外報部時代は外務省に詰めて旧ソ連情報の取材に当たった。札幌冬季オリンピックでは(次ページ四段目に続く)

府中便り

鈴木 義一

まずはイベントから。昨年一〇月一日、財団法人貿易研修センターの招聘により来日した「ウエストミンスター国際大学タシケント校」のA・アブドゥヴァキトフ学長と、カザフスタンのZPO「リスクアセスメント・グループ」代表のD・サトバイエフ氏が本学を来訪した。学長の表敬訪問の後に、教員・学生との懇談会が行われた。教員三名のほか、タシケント東洋学大学での交換留学を経験した学生を含む大学院生・学生が参加し、中央アジアの政治・経済・安全保障・外交等、多岐にわたるテーマについて質疑があった。

恒例の「東京外国語大学中野健三基金シンポジウム」は昨年で一三回目となり、一二月一六日に「チャストウーシカとロシア・ポップスの出会い」というテーマで開催された。講演は熊野谷葉子氏(慶應義塾大学非常勤講師)が「チャストウーシカ: ロシア・ソ連の村々に響いた民謡」、久野康彦氏(放送大学非常勤講師)が「ロシア・ポップス: ソ連時代から現代へ」であった。熊野谷氏はチャストウーシカのみならず、ペチカの

体験を映像とともに詳しく紹介し、ロシアの民俗全般におよぶ興味深い講演であった。久野氏の講演では、ポップス全体の中で音楽のジャンル、演奏方法、テレビ番組やCMの構成などが時代の流れの中でどう変化してきたか、やはり映像をもとに紹介され、ソ連・ロシアの大衆文化やサブカルチャーにも言及された。

昨年後半から折衝を進めた結果、モスクワ大学との間で「交流協定」と「学生交換に関する覚書」が締結された。これにより、外語大からは三年次の学生二名がこの九月に派遣され、モスクワ大学からもアジア・アフリカ諸国学部 (GAP) から一〇月に二名の学生が派遣されることが決まっている。以前からの協定校であるロシア国立人文大学との関係も継続しており、先方は国際合同シンポジウムの開催を提起するなど交流の拡大に積極的である。この他に、サントクト・ペテルブルク大学との間で協定締結の交渉と双方での審議が進行中である。ロシア以外でも、上述のタシケント東洋学大学は十年以上前から協定校であり、ロシア語専攻の学生の中で交換留学生として留学する者もいる。

モスクワ大学との間では、ロシア語教員の派遣も始まった。モスクワ大学国際教育センター(略称「ツモ」)

と本学のロシア語専攻との合意により、四月から客員准教授(本学での役職名は「特任外国語教員」としてイリーナ・E・ダフコーワ氏が着任した。過去に札幌大学での三年の教歴を有する、外国人を対象としたロシア語教育のプロフェッショナルである。したがってロシア語専攻のスタッフは、前田和泉先生とともに、今年度合計二名が新たに加わった。今後は、「ツモ」から二年任期で派遣されるモスクワ大学のロシア語教員がこの「特任外国語教員」のポストに就くことになる。

以上のように海外の大学との交換留学生を拡大する上で立ちはだかる問題の一つは、外語大における日本語教育態勢の限界である。今のモスクワ大学の学生の経済力からすれば、私費の短期日本語研修コースがあれば参加したいという者は少なくない。しかし、現在の外語大の留学生日本語教育のスタッフでは、国費留学生と大学間の交換留学生以外に、学部在学中の短期私費留学生を受け入れる余裕はない。本学からの私費留学生は、モスクワ大学に限っても一〇カ月以上のコースに平均して毎年一〇名以上、一〜二カ月の語学研修も含めると毎年数十名に及んでいる。「それなのになぜそちらには私費で参加できる短期日本語留学コースがないのか?」というのは、モスクワ

(前ページから続く)
「特別取材班」でロシア人選手との折衝、取材に当たった。また臨時特派員としてモスクワに短期駐在した。

定年後は、旧ソ連プラントの全盛時代で、東洋エンジニアリング(株)(ロシア語文献の技術翻訳)、松下電器マイクロモーター工場(同上)など不慣れたプラント機械の用語の翻訳に当たった。当時、松下(大阪府大東市)のマイクロ工場では、約二十数人の翻訳者が働いており、僕も一年余出稼ぎした。

最後は、(社)北海道倶楽部で会報の編集を担当、前後十年働いた。北海道出身の政・財界人の集まりで、今を時めく鳩山由紀夫氏、鈴木宗男氏らも取材の対象だった。仕事は楽でこの間海外旅行に数回訪れた。

ロシア語生活七十年、業績は微々たるものだが、文学作品から技術ものまで幅広く取り組んだことで、「生涯現役」の境地を味わっている。広大無辺の天恩に感謝するのみです。

平成二十一年九月七日 札幌にて
(昭和十五年卒 元北海道新聞記者)

大学側からすると当然の疑問であろう。しかし、これは外語大だけの現象ではない。この問題に抜本的な手段が講じられない限り、文部科学省がいくら旗を振っても留学生の「輸出超過」は変わらないだろう。

(教授・ロシア経済史)

着任の挨拶

前田 和泉



渡辺雅司先生の後任としてこの四月に着任しました。母校に戻って来ることができ、大変嬉しく感じています。指導教官だった亀山学長から辞令をいただいた時は、なんだか不思議な気分でした。学生時代に自分が習った先生方はまだたくさん大学に残っていらっしやるので、懐かしいような、恐れ多いような気持ちになることもしばしばです。一年生の時の中澤先生の授業で猫の絵を描かされたことがあったのですが、着任が決まった後、「あれはまだ保存してあります」と先生に言われたのには、さすがに驚きました。いやはや、一日も早く紙が劣化することを祈るばかりです。

私が学んだのは西ヶ原キャンパスで、あの狭さと汚さが今となっては

いい思い出です。学生時代はとにかく自由に好きなことをさせてもらいました。授業も人間関係も、一言で言うと「ゆるい」。勉強してもしなくても、誰からも何も言われませんでした。進級は厳しく、留年する学生は今よりずっと多かったです。五回生や六回生やそれ以上の猛者たちがあまりにたくさんいて、誰も気に留めていませんでした。そういう環境だからこそ、「やらされる勉強」ではなく、「自分から勉強する」モチベーションが引き出されたのかも知れません。勉強が楽しいと思っただけで大学に入ってからでした。ちよつと背伸びして図書館でロシア語の原書を借りた時は、なんだか大人になったような気がしたものです——結局最初の数頁しか読めなかつたにして

引つ込み思案だった自分が積極的に先生方に話しかけられるようになってたのも大学時代です。外大の、とりわけロシア語科の先生方は非常に気さくで、学部生の幼稚な質問にも嫌がらずに答えてくださり、こちらが質問したことだけでなく、次から次へと楽しい話を聞くことができたので、すっかり味をしめた私は、気がつくとも研究室に入り浸り、そして気がつくとも果鴨駅近くの居酒屋に移動し、最後は染井霊園に落ち着き、早朝から犬の散歩をしに来る善良な近

隣住民の皆様方の冷やかな視線を浴びながら始発電車待つことも多々ありました。そういう思い出を持つのは、きっと私だけではないでしょう。

今から振り返ると、自分という人間の基本が作られたのは学生時代だったと思います。研究者としても、自分の専門であるロシア詩と出会ったのは大学二年の時でした。それまで全く知らなかったロシア詩の世界は、知れば知るほど新鮮で、短いテクストの中に記された一つ一つの言葉が貴く、いとおしく感じられました。まさか二十年后も同じようなことを続けていようとは思ってもありませんでしたが。

大学院への進学を決めた頃はバブル真つ盛りでした。就職戦線は売り手市場で、友人たちは早々と内定をとっていました。院試を控えた私は四年冬になつてもまだ進路が確定していませんでした。そんな時、果鴨駅前であつた同じロシア語科のEさんとすれ違いました。「前田さん、院を受けるんですか？」と聞かれたので、「うん」と答えると、Eさんはこう言いました——「あのね、縁起の悪いことを言うようだけど、もし試験に落ちたとしても、絶対にあきらめちゃだめだよ。そういう励まされ方をしたのは初めてで、はっ

とさせられました。「試験がんばってね」「きつと大丈夫」と言ってくれる人はいいましたが、試験に落ちた場合のことを口にしたのは、後にも先にもEさんだけです。特に仲がよかったわけでもなく、個人的に話をしたこともほとんどなかつたので、なおさらその言葉は強く印象に残りました。あの時の情景は今もはつきりと目に浮かびます。幸い院試には無事合格しましたが、Eさんにはその後会う機会がなく、あの時のお礼を言いそびれたままなのが心残りです。

府中キャンパスに移った時、最初のおちはなんだかあまりにきれいすぎて、外大ではないような感じがしました。ただ不思議なもので、時間がたつにつれて、なんとなく西ヶ原と「同じにおい」がしてくるようになります。それはおそらく料理店のカレーのにおいばかりではないでしょう。学生たちと話をしていると、もちろん昔とは育つてきた環境も氣質も違はずなのに、「やつぱり外大生だな」と思うことがよくあります。彼らにも、このキャンパスで学ぶ間にたくさん思い出を作つてほしいと思つていきます。少しでもそのお手伝いができれば、これ以上の喜びはありません。

(平成四年卒 准教授・ロシア文学)

会計から

ロシア会の会費は、外語会の会費とは別立てになっており、つぎの通りです。

終身会費三万円(振込料 窓口三〇〇円 ATM二九〇円) または
年会費二千元(振込料 窓口一二〇円、ATM八〇円)

納入頂いた状況は左表の通りで、終身会費を納入された方が一名増加しましたが、収入合計では前年比約八千円の減収となりました。支出は、会報関係の費用を六万円弱圧縮できましたが、語劇への支援などにより、前年比十万円余りの増加となっております。

東京外語ロシア会2008年度収支

(2008年4月1日～2009年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (11名、単価3万円)	330,000
	年会費 (延べ52名、単価2千円)	104,000
	郵貯利息	4,036
	合計	438,036
注：年会費には千円、4～6千円、1万円納入者あり		
2 支出	会報制作費 (印刷製本作業代)	217,495
	会報宛名ラベル (支払先:外語会)	16,200
	会報郵送費	125,970
	霊園管理料 (ミチューリン先生お墓)	3,300
	郵便振替票の印字費 (会費納入用)	2,100
	語劇支援金	100,000
	払込手数料1件	525
	懇親会への補助	338,978
	合計	804,568
3 差引計算及び繰越金		
	差引剰余金	▲366,532
	前期繰越金	3,356,547
	次期繰越金	2,990,015

ロシア会懇親会収支 (2008年11月23日実施、単位 円)

1 収入	出席者会費 (卒業生53名 単価5千円)	265,000
	本会計からの補助	338,978
	合計	603,978
2 支出	料理代 (外語大生協)	500,000
	飲物代 (大久保商店)	103,378
	払込手数料 (1件)	600
	合計	603,978

これらの結果、年間収支は三十六万円余りの赤字となりました。

会の活動基盤を維持、強化するため皆様の一層のご支援をお願い致します。特に終身会費納入および懇親会への積極的参加をお願い申し上げます。

尚、振込み費用について、現在は、ゆうちょ銀行のATMからの振込みは無料ですが、十月一日以降も継続されるかどうか不明です。

懇親会については、先輩と後輩との交流を図る機会として学生は無料にしようという旧ロシア会 八杉先生以来の伝統を継承し、例年本会計より補助を行っております。

二〇〇八年度 終身会費納入者

(三万円一括納入された方、および分納額の累計が三万円に達した方)のお名前
(送金到着順 敬称略)

杉原公基、関澤康平、富道夫、
渡邊政子、田島信元、古屋明子、
高村忠良、島村ヨハネ、末益公一、
宜壽次彩、志田淳子。

計十一名

ロシア会会計 大浩義之

(追伸) 会報送付の封筒の宛名頭部に○印のある方は終身会費納入済みの方で払込票は同封してありません。

二〇〇八年度 ロシア会総会・懇親会報告

二〇〇八年十一月二三日の午後、外語祭最中の活気溢れる府中キャンパスでロシア会の総会・懇親会が行われました。

総会では、会長渡辺雅司先生の挨拶、この一年の報告、学生幹事の紹介のあと、会計から会計報告、会報係りから会報についての報告などあったのち、沼野恭子先生の「日本ブームの再来と現代ロシア文化」と題する講演がありました。パワーポイントでスクリーンに映し出されたロシア語の詩は脚韻をふみながら、音節数が五七七七の五行詩で、タンカでした。いまロシアで関心を持たれている日本文化についての興味深いお話でした。

懇親会では、渡辺会長、古茶副会長の挨拶、亀山学長の挨拶、沼野恭子先生の着任の挨拶があり、懇談・懇親のときにうつりました。

在学生のロシア民謡サークルが登場、その歌を聴き、また、参加者も一緒に歌いました。

細谷未青さん(平12卒)のギターを弾きながらの歌がありました。

この日はロシア語劇の上演日ではなかったのですが、出演者一同が衣裳をつけて会場に現われ、「スベードの女王」の一場面を演じてくれました。

晩秋の日もつづり暮れた頃散会しました。
(昭34卒 町田裕子)

『語劇』を役者が語る

外語祭ロシア語劇『スベードの女王／プーシキン』の上演から一年が経ち、今年もまたこのロシア会会報が発行される運びとなった。以下は、この一年を記念し、ゲルマン役を演じた二宮佳介さんに対して行ったインタビューである。



「改めて、去年はお疲れ様でした。『もう一年も前になるのか。早いもんだね。』」

「演劇の経験はなかったという二宮さんですが、劇を演じてみての感想はどうでしたか?」

「最高だったよ。演技をすることが、というよりも、最高の仲間と一緒に一つのものを作り上げたっていうことがね。入学したときはただの同級生だった俺たちだけ、語劇を通して戦友と

も言うべき仲間になれたと思う。だから参加して本当によかったと思ってるよ。心からね。」

「なるほど。二宮さんは主役に自ら立候補したそうですね。」

「そうだよ。目立ちたがり屋なんだ。」
「二宮さんはロシア語の成績が非常に悪いと伺っていますが、不安はありませんでしたか?」

「そんなこと誰から聞いたんだよ(笑)。まあ確かに俺はロシア語のできる方じゃないな。今年も進級が危うかったよ。でもそんなことは問題じゃない。演劇をやる時に重要なのは単語をいくつ知っているか、とかいうことじゃないだろう?」

「オーディエンスをどれだけ惹きこめるかじゃない?そりゃロシア語ができるに超したことはないんだらうけどさ。まあ周りは心配だったかもね。」

「実際、演技を観た限りではロシア語ができないように見えませんでしたよ。」

「それはやっぱり立派な先生たちのお陰だよ。」
「胡麻摺りですか?」

「本心だよ。」
「それを聞いて安心しました。それでは『スベードの女王』という作品への思い入れを語ってください。」

「それって原作のこと?それとも俺たちの演じた劇のこと?」

「では両方お願いします。」

「…(沈黙)。原作について答えるのは難しいな。例えば、『あなたの生まれてきたこの世界への思い入れを語ってください』なんて言われても答えら

れないだろ?それと同じで、つまり俺はゲルマンの目線からじゃないとあの世界を眺めることができないんだよ。あの作品の住人になってしまったんだ。だからもう客観的に見ることはできない。もちろん俺にとつて特別な作品であることは間違いないよ。なんせ文学の登場人物を演じることなんて後にも先にももうないだろうから。」

「それは、二宮さんにとつてのもう一つの世界ということですね?」
「ああ。でもここでは俺を固有名詞で呼ぶのは避けてもらえるかな。その時俺は二宮佳介ではなくゲルマンだからね。これは俺の役者魂つてやつだ。」

「失礼しました。それでは、『ロシア語劇・スベードの女王』はどうでしょうか。」

「あの劇は俺たちにとつて誇りだよ。たとえアポロ11号の月面着陸に下されているような世間的な評価は何もなくとも、俺たちは最高の劇を作り上げたと思ってる。衣装担当が作ってくれた軍服に袖を通して舞台上立った時に感じた誇らしい気持ちは、きつと俺だけでなく参加者全員が持っていたと思う。そしてあの劇を誇りに思うってことは、同時に友を誇りに思うってことでもあるんだ。あの最高の劇を作り上げたのは俺の仲間たちなんだからね。」

「ありがとうございました。それで最後に、劇を観てくださったオーディエンスと、これから伝統を受け継いでいく後輩たちへメッセージをお願いします。」

「俺たちの劇を観てくださった皆さん、

本当にありがとうございました。俺たちが懸命に挑んだ『語劇』を、どうか忘れないでください。後輩諸君、『語劇』には真剣に取り組んで欲しい。その日々はきつと一生の宝になるから。」
以上、二宮佳介の一人二役でお送りしました。

キャスト

- ゲルマン 二宮佳介
- リザヴェータ 宿谷愛美
- 老婆 町田堯史
- トムスキイ 小西孝博
- ナルーモフ他 船津佑太
- スーリン 小倉大輝
- チェカリンスキイ マカヴィンタ亮
- ポーリン 倉石愛子
- マーシャ 田中彩佳
- 侍女 三枝洋子
- スタッフ スタッフ
- 演出 鈴木麻苗美
- 照明 村田花子 黒神万由 岡野拓哉
- 音響 石川弘明 南浦誠
- 大道具・小道具 桂川明 井出晶子
- 奥村円 露崎真帆 和田麻美
- 山下明香
- 山下千紘 新藤明日佳
- 衣装 山下千紘 新藤明日佳
- 字幕 岡部李咲
- 柳静佳 腰塚沙織 腰原智子
- 岡部剛士
- プロデューサー 内田千裕
- 広告作成 秋山早紀

二度目の語劇

杉 香苗(二〇〇八年
有志ロシア語劇 演出)

二年生のときの『鼻』で、語劇の面白さに味を占めた私は、去年も有志として語劇に参加してしまつた。演目はブルガーコフの『イヴァン・ヴァシリエヴィチ』。冴えない科学者がタイムマシンを発明し、平々凡々たるアパート管理人がイヴァン雷帝と入れ替わつて事件を起こすというコメディで、『イヴァン・ヴァシリエヴィチの転職』というタイトルの映画作品は、ロシアでも絶大な人気で有名。一昨年に引き続き、そんな難しい作品に取り組むこととなつた昨年二度目の語劇は、前回とも異なつた苦しみと楽しさがあった。

初めての語劇と最も違つるのは、語劇に関わつたメンバーの多さであろう。卒業前にもう一度、語劇の舞台上に立ちたいという四年生の先輩から誘われて始動したこの語劇は、学年や専攻語、大学をまたいだメンバー構成になつた。前回の語劇に参加した学生の多くが、留学に行つてしまつたこともあり、最初はなかなか人数が集まらず苦戦した。役者をやつてくれないかとオファーしでは断られながらも、なんとか最低限の人数が集まつてもらつたことができた。ロシア語劇団コンツェルトで面識のある早稲田大学の学生にも参加してもら



タイムマシン稼働

うこととなつた。台詞の多い科学者役を務めてくれた彼は、遠くから時間をかけて練習場所である外大のキャンパスまで通つてくれた。四年生の二人は、ロシア語と演技の両面で大きな助けとなつたし、私をはじめ他の役者たちの刺激にもなつた。またドイツ大使役には、ドイツ語専攻の二年生に、人伝に

役を依頼し、出演を承諾してもらつた。お互いの言語の意味を教え合いながら打ち解けることができた。もちろん一昨年に引き続き参加してくれた役者、スタッフにも、就職活動が始まる忙しい時期に、スケジュールを合わせて練習に顔を出してくれ、真剣に取り組んでくれたことに感謝したい。一緒に語劇を作るのが二年目の彼らとは、率直に意見を交換することができた。このようなユニークなメンバーで語劇をや

れたのも、「有志」という自由な条件の下だったからだと思う。

印象に残っているメンバーは書記役の荒木くんである。彼は『鼻』でも二言三言の小さな役で出演しているが、今回はもつと台詞が多く、演技や台詞のタイミングも話の展開上重大な役であった。ロシア語が苦手な彼は、なかなか台詞が覚えられず、公演直前までこずつていた。楽観的な私も、彼に關しては「本当に大丈夫なのか？」と不安だつた。しかし、匹田先生にロシア語の発音指導を自主的に頼みに行つたり、自分で演技を考えあぐねてみると、誰よりも語劇に熱心に取り組んでくれた。その姿は、私のやる気を引き出し、奮い立たせてくれた。また私の粗雑なイメーヂから、素晴らしいタイムマシンをデザインしてくれたのも彼である。彼自身が楽しんで語劇に参加し、一生懸命になつてくれたのがとても嬉しかった。

この舞台のキャスティングで、一番悩んだのが主人公のイヴァンだった。一人二役というハードな役目であるし、雷帝の名に恥じない貴族がこの役には必要だと思つた。イヴァンを演じる役者を思い切つて女性にしたことが、成功だつたかどうかは観客だつた皆様に任せるとしても、私にとつてはわくわくするような試みであつたし、実際に魅力的なイヴァンになつたと思う。この大役を引き受けてくれた魚谷さんは、多量の台詞覚えや、難しい演技、長時

間の練習を、いつも嫌な顔せずこなしてくれた。彼女がいると稽古場の雰囲気気が不思議と和むのも、ありがたかつた。

そして制作の石川くんにも、また大変お世話になつた。大道具作り、パンフレット作り、衣装・小道具作りと、裏方として大活躍してくれた。縁の下の力持ちとして、私のわがままをたくさん聞いてもらつた。

今回の語劇は、練習不足や演出の思慮不足などが目立つ舞台になつてしまつたが、多彩なメンバーと出会い、彼らに支えられて、楽しく語劇を作ることができた。公演のビデオを見返すと、目を背けたくなるような場面も多い。それでも観に来てくれた友人のロシア人留学生に「おもしろかつた」と言ってもらえたのは嬉しく、一人でも喜んでくれたお客さんがいたならいいかなとも思う。

また今回の語劇では、渡辺雅司先生を筆頭に、ロシア会の皆様に特別な支援をしていただいた。皆様の助けがなければ、この舞台ができあがらなかつたことを附し、改めて御礼申し上げます。この語劇に力を貸してくださつた方々、観に来てくださった方々に本当に感謝しつつ、二度の無茶に飽き足らない私は、また今年も新たな語劇を作る予定でいる。足を運んでくだされば幸いです。

イルクーツクの恩師

沼野 恭子

『テレビでロシア語』のロケに同行

二〇〇九年秋からNHK教育テレビで、新しいロシア語番組『テレビでロシア語』が放送される。

二〇〇七年春に始まった前回のシリーズでは、モスクワ・ロケをもとに「ロシアの顔」である首都モスクワに焦点をあて、その変貌ぶりやおしゃれな観光スポットをたつぷり紹



イルクーツクの家は屋根や窓まわりの装飾が美しい。左から金沢ディレクター、コーディネーターのジュニーナ、筆者

介したが、今回のロケ地はシベリア・極東の四都市——ウラジオストク、ハバロフスク、ヤクーツク、イルクーツク。各地の活気ある光景はいま

でもなく、シベリア古来の伝統・風習・生活から、現代ロシアのさまざまな文化現象まで、貴重な映像を取りそろえて半年間お伝えしていくことになると思う。乞うご期待！

番組の講師を引き受けた私は、シリーズ全体の統括者で本学ロシア語学科出身の金沢恭子ディレクター（平成九年卒）と何カ月も前から打ち合わせを重ね、文法項目の配分を考え、リポーターのスキットにそれらの文法事項を嵌めこみ、持てる情報と人脈をほとんど総動員してロケの準備に協力した。学期中だったので、全行程三七日間に及ぶロケ取材のうち、同行させていたいたのはイルクーツクの一週間だけだが、初めて訪れた当地で印象深いことがふたつあった。

もともと、「イルクーツクに行くなら絶対オームリ（バイカル湖特産の白身魚）を食べてこなくちゃね」という家人の餞の言葉を胸に秘めて出かけたので、短い滞在の間に二度も美味しいオームリを味わったのだが、これは「印象深いこと」には数えまい。

大学時代にタイムスリップ

ロケ班とは別にひとり街中を歩きまわっていたときのこと。イルクーツク・アカデミー・ドラマ劇場のすぐそばで、ふとだれかの記念碑があることに気がついた。大通りの高い台座の上にそびえ立つて空を仰いでいる豪勢なレーニン像とは違い、道端になにげなくたたずんでいるといった感じで、今にも歩きだしそうにも見える像だ。



それがイルクーツク出身の劇作家アレクサンドル・ヴァンピーロフだとわかった瞬間、われ知らず胸を衝かれた。三四歳の若さでヴァンピーロフがバイカル湖で溺死したことや、『六月の別れ』という彼の戯曲のことを私はゆっくり思い出していた。いつのまにか街並がノスタルジックな色に染まり、私自身の大学時代の情景がいくつもまざまざと蘇ってきた。

た。

というのも『六月の別れ』は、大学二年生のときロシア語劇団「コンツェルト」で上演した忘れられない作品だからである。当時の私はターニャという大学生を演じるため練習に明け暮れ、ロシア語の世界に没り、ついでに恋をしながら、登場人物の学生たちに自分の身を重ねあわせてはロシアに憧れていたものだ。オクジャワの歌を知ったのも、この芝居の中に結婚披露パーティの場面があった仲間の一とりがギターをかき鳴らしながら歌ったからではなかったか。

まったく思いがけなくもイルクーツクで大事な恩師に再会した——そんな気がした。長いことロシア文学や文化の魅力を追いかけてきたが、そのきっかけのひとつとなった『六月の別れ』が私の来し方に想像を越えるほど大きく影響していたことを、今さらながら思い知らされたようにも感じた。

恩師は右手をポケットに入れたまま、永遠の若さでいつまでも私を見つめていた。

イルクーツクの前衛芸術家

もうひとつ印象深かったのは、番組の「文化コーナー」にインタビュー出演していただくために訪れた芸術家ウラジーミル・ソコロフのアトリエである。

ここは本当に面白かった！古いアイロン、年代物のミシン、昔の時計、楽器あるいは楽器の一部、古びたランプ、ベチカの蓋、壺、古い型の電話器。これらが何種類も、いくつもあり、所狭しとしかも整然と並べられているのである。ポルトやナットに至ってはもう数えることさえできない。何に使われていたのか想像することもできないとあらゆる金具。これらの「ガラクター」の大半は外で拾ってきたものらしい。



アートデザイナーのウラジーミル・ソコロフと筆者

カメラマンが、機材をつまんでおく洗濯ばさみのようなものを進呈すると、ソコロフは顔をほころばせて「じつは目をつけていたんだ」とお

茶目な返答をした。

そういえば、世界的に有名な前衛芸術家でインスタレーションの王者イリヤ・カバコフも、あらゆるモノを捨てずに取っておき、それらを用いて「ソ連時代」をアイロニカルな視点で表現しているが、カバコフに通じる感性を持ったアーティストであるソコロフが、亡命もせずモスクワにも出ていかず、ここイルクーツクの地でユニークなロシア版ポップアートを生みだし活躍しているというのも、なかなか興味深いことではないか。ソコロフがどのような作品を作っているのかについては、番組の中で詳しく紹介する予定である。どうぞお楽しみに。

『テレビでロシア語』の制作スタッフには、金沢ディレクターの他に、もうひとり本学ロシア語学科出身の山田智子アシスタント・ディレクター(平成一六年卒)が加わっている。ふたりともロシア語力を生かし、きめ細かく仕事をこなして、じつに有能で頼りになる。こういう素敵な仲間たちと一緒に仕事ができるのだから、収録も楽しくてしかたない。

そして、新しいシリーズに「ロシア人会」会員の才能と情熱が発揮されることを心から誇らしく嬉しく思う。(昭和五五年卒 教授・現代ロシア文学)

北の島の、東の果てで

不破 理江

北海道道東の町、根室は、夏に霧が多く、七月になっても連日10℃を切る日が続くことがざらにある。ここでは高山植物が平地に咲く。北の大地に「首鵬」のように小さく飛び出したこの半島を、太平洋とオホーツク海が両側から挟むようにぐるり取り巻き、天気の良い日には知床連山に続いて国後島の山々が浮かんで見える。気候も、植生も、東京あたりから見ると、もうここはどこか日本ではないような感じがする場所だ。



北端捉択

この大地が東に果てるところからは、同時に千島へ向かって開かれた海が始まる。根室は、平和条約問題が解決されるまでの間の相互理解増進を図ることを目的として、一九九

二年に始まったビザなし交流の際の日露双方の訪問のスタート地点となっている。さらに二〇〇三年から人道支援事業の一環として四島の患者を市立病院で受け入れるようになり、当時根室に在住していた私に根室市初の患者受け入れの通訳の依頼があった。受け入れ側は何もかもが手探りで、私自身医療通訳は初めてであった。患者側も不安に満ちながら、ただおそらく最後の望みを日本での治療にかけてやってくるはずだ。通訳として考えつく限りの準備をして、彼らを待った。

初めて会ったアンドレイ君は、真つ青な顔をして姿勢を保つことができず、立つどころか座っていることもできなかった。地元で兵役に就いている19歳の時、休日に海に潜ろうとして首の骨を折ったこと、天候が悪く、大陸の病院へ搬送するためのヘリがなかなか来ず、三日間意識が混濁したまま待ったこと、大陸の陸軍病院へ運んで手術を受けたが、医師から数日のうちに自分で尿が出なければ助からない、と告げられたこと。尿が出ないまま数日が過ぎ、もうだめかと思つたある朝、付き添っていた母親がふと目を覚まして息子の布団にふれるとびつしよりぬれている、おしっこだ！と思つた彼女はとっさに指にその液体をつけてなめて確かめたということ。本人は目覚めると

すぐに、「ママ、冬靴がないから買ってくれ」と言うので、彼女は飛び出して買いに行って、履かせたこと。それ以来再び立つて歩くことをめざし親子で自己流のリハビリを続けてきたこと・・・。三年間をベッドで過ごした人とは思えないほど、アンドレイは他人に気遣いをしてくれ、ごく自然に話をする。ママも甘やかすところが一切なく、男の子の母親らしい、明るくきびきびした対等な会話をしている。



マリーナさんとアンドレイと見送りの人たち

到着して数日後、レントゲン写真などができて、整形外科医の面談があった。若い医師が骨折の程度や場所について話すのを逐次訳していく。ところが、医師が「これはもう回復しません」と言った時、うっかりその言葉を訳してしまった私はママの

顔色がさつ、と変わるのを見た。「どういう意味ですか?!」心の底から絞り出すような声で聞き返した彼女に、私はとっさに「・・・すぐには、という意味です。時間がかかります。」と勝手に付け加えていた。すると彼女はほっと安堵して、「それはわかっています。」と答えた。私はさりげない様子で医師に、「先生、彼らはリハビリを希望していません、リハビリ治療の処方をお願いします。」と話した。医師は「え?そう?」余り期待できないよ、と言う感じで意外そうに答えたが、とにかく同意してくれ、翌日からリハビリが始まった。

リハビリ室の先生とスタッフは、実に明るいい人たちでスポーツジムに来たような元気な気持ちにさせてくれた。先生は初めての頸椎損傷の、しかも外国人の患者に自分の経験のすべてを注いで運動計画を考えてくれ、彼に課していった。ママも付き合って大変な量の筋力トレーニングをこなしていく。昼休みを削ってまで毎日頑張ってくれた先生のおかげで、数日でもぐましい効果がでてきた。自力で排泄ができるようになってきたこと、座っていられるようになってきたこと。回復の成果を知った整形の医師は驚き、嬉しそうにいろいろの様子を見に来る。どれほど大量できついトレーニングでも、決して

できないと言わないアンドレイが、これまた、もつとやれ、と全く甘やかさないママと一緒に一日中頑張る姿を見て、日本人の患者さんたちも暖かい声をかけてくれるようになった。最初は、何で外人の治療を、という感じだった看護師さんたちも、彼らの会話やこれまでのことなどを伝えていくうちに非常に共感を持って接してくれるようになり、励ましの言葉をあちこちでかけられるようになった。病院のスタッフ、周囲の日本人、患者本人たちの間に言葉の壁を乗り越えた信頼と共感ができた。退院の際には、ママは涙ぐんで、「私たちの感謝の気持ちは言い尽くしようがありません」と挨拶していた。

アンドレイ君は相変わらずリハビリを続け、杖で歩けるほどになってきた。自信が出てきて一昨年ついに通信制の大学に入学した。損傷が深刻なため、日本の病院でもらっている薬を飲み続けないと足の不随意運動が起きてゆっくり眠ることもできず、また内臓の定期検診も不可欠なため毎年の来院が必要となっている。市立病院の院長先生と、私の業務日誌を読んでくれていた外務省の支援室の方々のご理解によって、今のところそれが実現している。

二〇〇三年以降市立病院での受け入れは毎年十人程度あり、その全て

の患者たちの治療の手助けに関わらせてもらうことができた。中には大変きついケースもあり、こちらの方が先に倒れてしまいそうなお中、患者が次に生きる望みをつないでいけるような方向で送り出せるよう、先生にこう話してやってほしいと懇願したりもした。いつも良くしていただいているが、特にあの時の先生、医療スタッフには心から感謝している。



見送りの人たちと患者一同

文学音痴でいつも何か後ろめたさを感じていた私だが、人道支援に関わって、私にとつてのロシア語は、人と人をつなぐための手段、生きたコミュニケーションの手段の一つとして、時々、人への信頼という大きな褒美をもたらしてくれている。(昭和六二年卒)

モスクワ郊外の夕べ

関根秀人 (在モスクワ)

言語も生き物。時代が変われば、言葉の意味も時代の要請に従い変わっていくものだが、ロシアの夏を語るうえで欠かすことのできない「ダーチャ」も、生活に余裕のある所得層が増えたモスクワでは、ジャガイモ、キャベツなど冬に向けた蓄えをあくせくして作るような場所ではなく、まさに余暇を楽しむ別荘という意味合いのほうが大きくなってきているような気がする。いまや、基本的な食品は年中容易に手に入るわけで、かつての物不足などどこ吹く風だ。ダーチャの範疇を越して、年中生活できる立派な御殿を建てて、モスクワや近郊の都市へ車で仕事に通う人も増え、その場合は、郊外の家 (загородный дом) と呼び、区別するようになった。

私がダーチャの魅力にとりつかれたのは、ガーデン・デザインナーを自称するロシア人の友人との出会いがきっかけである。五年前のある夏の日、彼のダーチャに招待されると、寝室だけの二階建ての家と、食事をとる平屋、便所が点在する庭に、処狭しと様々な植物が植わり、その種類にはただただ圧倒された。その翌年の初夏には友人を日本へ招待し、東京、京都、鎌倉、日光と観光プロ

グラムを組み、案内した。庭園めぐりは満足していたが、行く先々で、本では読んだことがあるが見るのは初めてという草木が日本では雑草のように生えているのを目の当たりにし、観光はほどほどに切り上げ、ほとんどのスケジュールは種苗業者や植物園めぐりとなり、若干あきれてしまったが、それぞれの名札を見る前に、これはロシア語で何と言って、ラテン語では何というやつだ、と一つ一つ言い当てる、これまた呆気羅漢であった。



花溢れるモスクワ郊外のダーチャ

そんな彼との交友を通じ、子供のころからの花好きに加え、モスクワ郊外で自分の好きな花を育ててみたという気はますます強くなり、三年前の夏、タイミンクよく、私も一八〇坪の土地をモスクワ郊外に手に入れることができた。古い家屋は取り壊し、新たに小さな木造コッテ

ジと倉庫を建てなおし、雑草だらけの荒地は土壌整備からのスタート。もともと地下水が地表に近く水はけをよくするための排水路を施工で、水遣りの便宜のため給水システムを地下に施し、早春と晩秋の給水のない時期に備え井戸も掘った。庭は日照条件、風の向き等を考慮し、いくつかのテーマにわけ、今年になってようやく客も呼べる状態に。果樹、温室、ミニ菜園も楽しみの一つとなっている。

六月、七月と、夏の盛りには、私もしばしばダーチャからモスクワへ通っているが、まだ早い夜明け前から鳥の澄んだ声とともに起床し、都会では味わえないすがすがしい空気をいっぱい吸うと、短い睡眠を埋め合わせるかのごとく、一日の元気を取り戻させてくれる。私のコッテジは夏仕様の簡素なものゆえ、さすがに冬は寝泊りはしないが、魔法瓶にお茶を入れ、手弁当をもって日帰りで往復することがある。積雪の少ないときは貴重な植物に雪をかきあつめてかぶせたり、どんな季節でもそのときどきの世話がある。こんなこともロシアならではの体験だ。

そもそもロシアの夏は北海道のそれと同じく、短い。その短い夏に花を楽しむとなると、勢いロシア人の志向として、見た目が派手で、大輪、たわわに、かつ少しでも長い間咲くものが好まれる。日本人の、短い命

の中に美意識を見出すような姿勢は、感覚的に受け入れがたいのかも知れない。派手さと独特な芳香が見る人を魅惑するジャーマン・アイリスはロシア人の間でも人気が高いが、日本の花菖蒲、アヤメとなるとほとんど紹介されていないし、知っただけでもロシアの気候には向かないと倦厭がられる。しかし、ロシアのアイリスの専門家、花菖蒲の育種家らと知り合い、日本が世界に誇ることで、きる園芸種たる花菖蒲を何とか自分の庭で育ててみたいと思ひ、植えたのが私のモスクワ郊外の花菖蒲の園の出発点だ。もともと花菖蒲の祖先は、ロシア極東部から中国北部、朝鮮半島の一帯に自生するノハナシヨウブだといわれ、ある程度の耐寒性は備わっているのである。



花菖蒲に囲まれて

ソ連時代からロシアでは耐寒性の強い、早生の穀物や根菜類の品種改



良が進んでいたようだ。花は人の心を癒しても、腹の中まで満たさない、それゆえに実益のあるほうに注意が払われてきたのだろう。とはいえ、どんな時代にも、他人が目を向けないところに関心をもつ人がいるもので、そういう人たちの地道な努力があつて、今日、花菖蒲の世界でもロシアの品種が生み出されている。今では日本の花菖蒲協会とロシアの育種家の仲立ちをしながら、将来的には自分の品種をモスクワ郊外で作ってみたいという、ちよつとした野心もあるが、まずは自分の好きなこの花を通して、ロシアと日本の橋渡しになればと思つている。造園三年目にして、いまや私のモスクワ郊外の庭には花菖蒲だけでなく、牡丹、菊も加わり、それぞれのロシアにお



ける専門家との接点、いわば時代や空間を超えた花への愛を通じ、異文化間をまたがる人類の価値感の最大公約数を模索しているような気がする。花好きなお隣さんとの何気ないおしゃべりや、分け合う草木がまた人の心を癒しているのかもしれない。ロシア語を学んだ人なら誰でも覚えて「モスクワ郊外の夕べ」は実は比較的新たしい歌で、戦後のやつれ、すさんだ国民の心を癒すべく作詞・作曲されたものと、ドキエムンタリー番組で聞いたことがあるが、いまやこの曲は平和な時代を過ごす私の身体と心の中で、私だけのメロデーとなつて響いている。
モスクワ郊外のダーチャにて
(平成二年卒 双日勤務)

講演会のお知らせ

● オリガ・スラヴニコワ Olga Slavnikova

講演 「人気のメカニズム」現代ロシアの人気作家たち」

二〇〇九年十月三日(金) 午後二時五十分～四時二十分

府中キャンパス 二二二六教室

「スラヴニコワ」

一九五七年生まれ。作家・評論家。ウラル大学(ジャーナリズム専攻)卒業後、編集者、評論家として活躍。「犬の大きさになったトンボ」(一九九六)、『鏡の中でひとり』(一九九九)、『不死の人』(二〇〇一)などで次第に作家として頭角を現し、二〇〇六年に大作『二〇一七』でロシア・ブッカー賞、学生ブッカー賞を受賞。新人作家の育成にも努めている。邦訳は、短編「モンブレジールの終わり」岩本和久訳(『神奈川大学評論』二〇〇九年62号)、『超特急「ロシアの弾丸」』沼野恭子訳(『新潮』二〇〇九年十二月号)。

● リュドミラ・ウリツカヤ Ludmila Yurkova

講演 「姉妹なる死」

二〇〇九年十一月五日(木) 午後三時～五時

府中キャンパス 一〇六教室

「ウリツカヤ」

一九四三年生まれ。作家。モスクワ大学(遺伝学専攻)卒業後、遺伝学研究所に勤めるが地下文書に関連して辞めさせられ、ユダヤ劇場や人形劇場のシナリオを書くようになる。「ソーネチカ」(一九九二)でフランスのメデイシス賞、「クコツキー家の人びと」(二〇〇二)でロシア・ブッカー賞、「敬具シューリク様」(二〇〇四)でロシア最優秀小説賞、「通訳ダニエル・シュタイン」(二〇〇七)でポリシヤヤ・クニガ賞を受賞。邦訳は、『通訳ダニエル・シュタイン』前田和泉訳(新潮社、二〇〇九)、『それぞれの少女時代』沼野恭子訳(群像社、二〇〇六)、『ソーネチカ』沼野恭子訳(新潮社、二〇〇一)。

いずれも現代ロシアを代表する実力作家の通訳付き講演(無料)です。関心のある方はどなたでも歓迎ですので、ぜひいらしてください。
お問い合わせ 沼野恭子研究室 042-330-5266 nukyoko@tufs.ac.jp

〈文献紹介〉

加藤栄一著 『時事ロシア語』

(東洋書店刊)

鈴木 義一



「事務総長」になる。要するに、ただ単に露和辞典の訳語を並べても日本語訳にはならないということである。

技術や文化の変化が急速で、様々なコミュニケーション手段が発達した現代においては、おびただしい数の「新語」が現れては消えてゆく。過去二〇年のロシア語の語彙は、こうした現代社会に共通する状況に加えて、体制転換によっても大きく変化した。これらの新語を把握するだけでも大変だが、それぞれの確定した訳語を確認する作業も容易ではない。そうした中で、この『時事ロシア語』は、初級文法を終えた学生から、日常的にロシアの新聞・雑誌・ニュースサイトを読むことを仕事としている人に至るまでの広範な人々にとって力強い助けとなる。これまでに私は、徳永晴美『ロシア語通訳コミュニケーション教本』ナウカ(二〇〇一年)と宇多文雄・原ダリア『ロシア語通訳教本』東洋書店(二〇〇七年)を必要に応じて参照してきた。本書の特徴は、これらと比較すると明らかである。まず本書は、「時事ロシア語の入門編」であり「語彙力と構文把握力の養成を目的として」いる。したがって、初級ロシア語を終えた学生のための読解のテキストであるが、現代用語の語彙という点では、上記の二つの『教本』

をはるかに上回っている(ロシア教育省の「外国語としてのロシア語検定」レベル1の語彙力を想定している)。「教本」はやはり上級者向けのテキストであるが、本書は時事ロシア語の入門者でも興味さえあれば十分に使いこなせる。また実際には、入門者のみならず中級以上のロシア語能力の人にとっても役に立つと思われる。

本書の構成は、「内政」にはじまり「外交・国際関係」、「経済・産業」、「軍事・国防」、「犯罪・司法」、「事故」、「気象・自然災害」、「市民生活」、「文化」の合計八つの章で成る。各章はさらに「金融政策」、「インフレと物価変動」などのテーマに分かれるが、「テーマ」との二ページは、ニュースサイトから収録された一〇行前後のロシア語の記事から始まる。続いてこの記事中の重要な単語が「語彙」の項目で説明され、その下に記事の和訳が「訳例」として付される。「語彙」で解説されている語は、ロシア語テキスト・日本語訳では青字になっており対応関係がよくわかる。二ページめでは、これらの語彙に関連する重要な語句や特徴的な表現が詳述される。こうして効果的に語彙力を高めることができる。

「付録・資料」では、ロシア連邦政府機関の組織や国際機関の名称と

訳語などの一覧があるが、個人的なことを言えば、軍とミリツィアの階級名や正教会の位階名の一覧と解説が、これまでほとんど知識がなかったので有益であった。さらに巻末には、日本語とロシア語の「索引」があり、これは辞書として使うこともできる。たとえば、「地球温暖化」と「ならず者国家」をロシア語でどう表現するかご存じだろうか。日本語索引を調べると、「地球温暖化」のロシア語とともに「気候温暖化」や「温室効果ガス」のロシア語まで知ることがができる。一方ロシア語の索引を利用すると、ロシア語とその派生語に対応する日本語のメディアでの用語をまとめて確認することができる。

私の専門分野は言語学やロシア語学ではないので、ここではもっぱら有用性という点から本書を紹介した。しかしロシア語、とくに語彙論を専門とする人であれば、まったく別の角度から本書を評価することができよう。一つだけ触れておくならば、本書は著者が独自に構築したコーパスをもとに作られている。情報処理技術が普及する以前の、たとえば手書きのカードを集める作業では、言語の変化のスピードに到底追いつかなかっただろう。

(二〇〇八年九月刊・三〇二ページ・二、八〇〇円(税抜き))

東京外国語大学のロシア語の授業で私が担当しているのは、新聞・雑誌記事などの時事的な内容のテキストを訳読する二年生の授業である。初級文法を終えたレベルの学生には最初に、マスメディアのロシア語には多くの新語が登場すること、訳文では日本語のメディアで定着した訳語に対応させることの二つを指摘する。前者は言うまでもないと思うが、後者についてはたとえば *сkeptаb* という語を例にするとわかりやすい。共産党「書記」、アメリカ合衆国国務「長官」などに「秘書」の訳語を充てることはできないし、この語に同一の形容詞がつくと、ソ連共産党であれば「書記長」、中国共産党は「総書記」、国連では

二〇〇九年度

ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。年に一度のロシア科全同窓生の集まりです。各年度、各クラスでお誘い合わせの上、是非、ご出席下さい。

日 時 11月23日(月・祝)

午後一時から総会
三時から懇親会

総会終了から懇親会が始まるまでの間、小一時間ほどの時間があります。当日は外語祭の期間中です。どうか、在学生たちのイベントや模擬店をお楽しみください。

総 会 府中キャンパス研究講義棟一〇七教室

会務報告など

講 演 「外語露語科と虚無党精神」

渡辺 雅司氏
渡辺先生が研究なさってきたテーマの一つです。

懇 親 会 三時から 大学会館一階食堂で

会 費 五千元(卒業生)

ロシア語劇は『チェーホフ小品集』、ユーモア作家時代の作品を原作とした一幕物四つ、「愚かなフランス人」『FRENCH QUARTY』、「別荘の人のびと」『TANUKI』、「コーラスガール」『KORNETKA』、「別荘で」『Ha Aare』。上演日は23日15時〜16時10分とのことです。

プロメテウス・ホール

建設のための募金のお願

学長 亀山 郁夫

ロシア会の皆さん、私たち外語の卒業生にとって宿願だった「異文化交流施設」(仮称)が、来年一月末によいよ竣工の運びとなる予定です。この施設の一部には、本学の校歌からその名を採った、五百一席からなる「プロメテウス・ホール」が入っております。本建設には、主として、文部科学省による施設整備費および目的積立金があてられておりますが、私としては、本施設をできるだけ質の高いものとし、ロシア会の皆さまにも、今後、さまざまな催物の場として末長く愛用していただくため、皆さまからの温かいご支援を心よりお願いする次第です。一口一万円での募金ですが、十万円以上の募金を寄せてくださった方には、ホール内の椅子にその方のお名前を刻んだプレートを用意させていただきます。また、それぞれの年度の卒業生有志で、十万円を集め、たとえば私の場合であれば、「昭和四十三年入学ロシア語学科専攻有志」といった形でプレートを張ることも可能です。さらには、本学の出身者で優れた業績を残した過去の先輩や、親しい友人の名前を刻むこともできます。詳しくは、東京外国語大学のHPに詳しく記載されておりますので、それをご覧いただけたら幸いです。

編集後記

ロシア会会報12号をお届けします。今号は一九四〇年ご卒業の米内哲雄先生から在学生まで、実に幅広い年齢層の方々にご寄稿いただき、いつもの倍のページ数となりました。

この夏、フィンランドとロシアを訪問なさった渡辺雅司先生からは、旧知のロシアの詩人、作家たちと再会したときのことを三十年前の思い出と共に書きになった文章を巻頭にいただきました。

九月三十日に始まったNHKの「テレビでロシア語」の舞台はシベリア四都市のようですが、講師の沼野恭子先生のロケ同行記、根室の市立病院で人道支援事業として受け入れた四島からの患者のために通訳をなさった不破理江さんの文章、モスクワ郊外のダーチャに素敵な庭園を造られた関根秀人さんの文章、お忙しい中をご寄稿下さいまして有難うございました。

ロシア詩が専門の前田和泉先生の着任の挨拶をいただきました。

ちようどタイミングよくロシアの作家お二人の講演会のお知らせを載せることができました。

(昭34年 町田裕子)